

## 人工乳首の選択に関わる要因と母乳確立への影響

母乳育児が推進される中、母乳栄養率は生後3カ月で4割に留まり、6割の乳児は人工乳首を使用している現状にある。人工乳首は、使い方によっては乳頭混乱:nipple confusion を引き起こす原因となり、母乳の確立を困難にする。本邦では様々なタイプの人工乳首が使用されているが、人工乳首の選択基準や適切な使用法は明確にされていないのが現状である。

我々は、これまでに吸啜時における舌運動の超音波解析や下顎運動をビデオ撮影し、母乳と人工乳首の吸啜運動の相違について画像解析を行い、両者の違いを検討してきた。その知見をもとに、母乳の吸啜を阻害しにくい人工乳首の開発に取り組むとともに、人工乳首の適切な使用方法を検討してきた。

本研究は、母乳育児のスムーズな確立と、人工栄養・混合栄養から母乳に復帰させるための支援方法を確立することを目標に、①母乳育児を支援し、人工乳からの離脱を図る目的で開発された人工乳首を使用し、母乳確立への影響や授乳困難との関連を評価する。②母親がどのような基準で人工乳首を選択しているかを知り、人工乳首の適切な選択および使用方法を検討することを目的として調査研究を行った。

対象施設において、通常使用されている乳首(A乳首)と開発品(B乳首)を一定期間、交互に使用し、入院期間中、1ヵ月健診時、3ヵ月時の母乳率および授乳状況や母乳代替品の補足、トラブルの発生状況、人工乳首の使用状況と選択理由に関して比較検討を行った。

本研究は新生児を対象とした準実験研究であり、大学の研究倫理委員会の承認を得て実施し、使用した開発品(B乳首)は、食品衛生法(ゴム製哺乳器具項目)に基づく安全衛生評価試験、引裂・噛み切り・パンク試験等による物理強度評価、および吸啜シュミレーションロボットによる乳首の機能評価等により、医療安全用具としての適合試験に合格しており、使用にあたっての安全性は確保されている。

使用乳首別に栄養法を比較したところ、コントロールであるA乳首使用群においては、退院時(産後6-7日目):母乳30.4%、混合60.9%、人工8.7%(N=23)、1ヵ月検診時:母乳52.2%、混合43.5%、人工4.3%(N=23)であったのに対し、開発品(B乳首)使用群では、退院時:母乳70.0%、混合20.0%、人工10.0%(N=20)、1ヵ月検診時、母乳60.0%、混合35.0%、人工5.0%(N=20)であり、退院時には開発品(B乳首)使用群のほうが母乳率がかなり高率であった。1ヵ月検診ではB乳首の母乳率はやや低下したものの、A乳首よりも高率を維持していた。

吸啜力が弱い、稚拙など、新生児にうまく飲めない状況がみられた場合に助産師・看護師が判断して乳首の選択・変更が実施されていた。授乳トラブルの発生状況に差は見られなかった。

母親たちの人工乳首の選択理由では、A、B乳首ともに「産院で使用していたから」が最も多く、そのほかは「付属でついてきたから」など、受動的理由が多く、「母乳に近い形だから」「顎の力が付きそう」「飲みやすい形になっていると書いてあった」など、商品の特徴をとらえて、積極的な意思のもとに選択している者はわずかであった。